

最近の朝鮮民主主義人民共和国の 歴史学学会の研究動向と成果について

黄 明 哲

はじめに

1. 歴史叢書の編纂事業の完成
 2. 古代および中世史研究の成果
 3. 日本による朝鮮侵略時期の歴史研究の展開
- おわりに

はじめに

偉大な領袖金日成同志はつぎのように述べている。

「歴史学分野でもまだ解明すべき問題が多いです」

(金日成『金日成全集』第32巻、332 ページ)

近年、朝鮮社会科学院歴史研究所をはじめとする朝鮮民主主義人民共和国（以下、朝鮮）歴史学学会では、主体の方法論¹を具現して朝鮮民族の歴史を正しく解明し、輝かすための学術事業において一定の成果を収めている。

最近の朝鮮歴史学学会の研究動向と成果で注目されるのは、大きく3つの点である。第一に、朝鮮民族の半万年の歴史を総合的に体系化するための研究において成果が成し遂げられたことである。第二に、朝鮮の歴史で強大国との名前を轟かした高句麗などの歴史に対する研究が深化したことである。そして第三に、日本の朝鮮侵略と罪惡の歴史をより幅広く解明するための研究が活発に行われたことである。

1. 歴史叢書の編纂事業の完成

朝鮮歴史学学会の最近の研究動向と成果で注目されるのは、まず半万年民族史を新しい

1 主体の方法論とは、人民大衆は歴史の主体であり、人類の歴史は自主性のための人民大衆の闘いの歴史、創造の歴史であるという歴史観に基づいて、人類の歴史を、人民大衆を中心に分析評価する研究方法論として、歴史研究において主体性の原則、党性と労働階級性の原則、歴史主義原則を根本にすることである。

形式で総合的に体系化するための研究過程として、『朝鮮部門史』と『朝鮮断代史』の執筆編纂事業が完成したことである。

1980年代初めに朝鮮の民族史を主体的に総合体系化した『朝鮮全史』が出版されてから、歴史学研究においては多くの成果が成し遂げられてきた。神話的人物と見なされてきた檀君は、実在した人物であるというのが檀君陵発掘を通じて確認され、檀君朝鮮の建立年代がB.C.30世紀初めと明らかになることによって、朝鮮史の創始に対する解明において大きな前進が成し遂げられ²、また政治制度史、経済史、反侵略および対外関係史、文化史などの部門別研究成果が大きく成し遂げられた。

このような状況で、社会科学院歴史研究所では、半万年の朝鮮民族史をより具体的に体系化した歴史叢書『朝鮮断代史』(全38巻)と『朝鮮部門史』(全40巻、改訂版)を編纂発行した。

『朝鮮断代史』は、檀君朝鮮の成立から朝鮮封建王朝時代までの朝鮮民族の長久な歴史を古代と中世国家の時系列順に、通史体と部門史体とに結合させ、高い科学理論の成果と通俗性を保障して、豊富に叙述した歴史叢書である。その『朝鮮断代史』は、古朝鮮史、扶余史、句麗史、辰国史、高句麗史(全5巻)、百濟史(全2巻)、新羅史(全3巻)、高麗史(全5巻)、朝鮮封建王朝史(全13巻、そのうち文化篇が1巻)、年表(全2巻)で構成されている。

『朝鮮断代史』には、20世紀に編纂完成した『朝鮮全史』が刊行された後の朝鮮の歴史学学会が収めてきたさまざまな研究成果が集中的に盛り込まれている。『朝鮮断代史』には、朝鮮民族の最初の古代国家である古朝鮮を打ち建てた檀君の墓が発掘されることによって、新しく解明された檀君古朝鮮の成立時期をはじめとして、初期封建国家である高句麗と百濟、新羅、加耶の建国年代に対する内容が補充された。また、朝鮮の民族史発展において先導的役割を果たしたとみなされる高句麗の地位と発展過程、そして百濟、新羅、加耶、渤海、高麗など、この地に存在した中世時期の国家の政治、経済、軍事、文化などの発展に大きく及んだ高句麗の強大な影響に対しても、歴史的事実に基づいて幅広く叙述している。のみならず、外来侵略者に抵抗して闘った朝鮮民族の闘争史と世界文化の宝物庫を豊富にする民族の優れた文化遺産を全面的に紹介した。

そうした『朝鮮断代史』(全38巻)が出版されることによって、主に時代別、時期別に沿って叙述されてきた従来の歴史図書とは異なり、朝鮮民族史を最初の古代国家である檀君朝鮮や千年強国として誇り高く後世発展に強大な影響力を及ぼした高句麗をはじめとして、この地に存在した国家別に豊富なデータを揃えて全面的に体系化できるようになった。『朝鮮断代史』が成功裏に刊行されることによって、朝鮮民族の悠久な歴史を固守し、

2 『労働新聞』1993年10月2日付。また、『檀君と古朝鮮に関する学術発表会討論集』社会科学出版社、1996年、31-38頁。

限りなく輝かして行くことのできる思想理論のおよび科学的土台を一層強固にすることとなった。

他方、『朝鮮部門史』（改訂版）は、朝鮮の半万年民族史を政治、経済、文化、軍事分野などに分類し、全面的に体系化した歴史叢書である。2010年に『朝鮮政治制度史』、『朝鮮人の反侵略闘争史』、『朝鮮鉱業史』、『朝鮮風俗史』、『朝鮮音楽史』、『初期朝日関係史』をはじめとする20巻の分野別書籍が発行されたのに続き、20巻に達する多様な分野の書籍が発行されることによって、『朝鮮部門史』（改訂版）の刊行がすべて終了した。

『朝鮮断代史』と同様に、最近公刊された『朝鮮部門史』（改訂版）は、政治と経済、文化をはじめとする多くの社会生活分野に対する歴史研究において学術的意義を有し、データの価値が大きいとして国内外で多くの反響を呼んでいる。2015年に新たに発行された『朝鮮部門史』（改訂版）の分野別書籍の中には、『朝鮮農業史』、『朝鮮商業史』、『朝鮮手工業史』（全2巻）、『朝鮮交通運輸史』のように、原始、古代、中世、近代に渉る長久な時代を通じて朝鮮民族が連綿として刻んできた多様な経済分野の発展史を叙述した価値のある書籍もある。また、歴史発展に相反した段階で成し遂げられた教育発展過程を主体的立場で研究解明し体系化した『朝鮮教育史』、近代愛国文化運動の発生と発展衰退過程を全面的に新たに体系化し、各々の歴史的段階で文化啓蒙活動の主要形態と内容および特徴などを科学的に解明した『朝鮮近代愛国文化運動史』、原始社会から近代までの民族体育を体系的に叙述した『朝鮮体育史』、原始工芸の発生から封建社会末期までの工芸発展史を取り扱った『朝鮮工芸史』をはじめとして、『朝鮮彫刻史』、『朝鮮建築史』の如く、文化分野の豊富な歴史データが盛り込まれた書籍もある。さらに、古代から朝鮮封建王朝に至る時期に各々存在した軍隊の階級身分構成、編成原則、中央軍と地方軍の兵種、軍種構成、指揮体系、軍事制度の改編と変化などを幅広く叙述した『朝鮮軍事制度史』（全2巻）、外来侵略者を追い出すためのねばり強い闘争過程において早くも古代期から水軍を建設し、これを強化発展させて国の水軍史を輝かした歴史を盛り込む『朝鮮水軍史』も専門家と読者の関心を集めている。

このように、歴史叢書『朝鮮断代史』（全38巻）と『朝鮮部門史』（全40巻、改訂版）は、読者により幅広い歴史知識を与え、民族的誇りと自負心を植えつけるのに積極的に資している。

2. 古代および中世史研究の成果

朝鮮歴史学学会の最近の研究動態と成果で第二に注目されるのは、古朝鮮と高句麗、高麗など、古代および中世史研究において一連の成果が成し遂げられたことである。

まず、古朝鮮時代に発生し歴代に渉り朝鮮民族国家の支配的思想であった天孫思想、太陽崇拜に対する研究において一連の成果が成し遂げられた。古朝鮮史を主体的に解明するのは朝鮮民族史の悠久な歴史と関連する重要な問題である。近年学会では、古朝鮮に関わ

る文献史料の研究とともに、遺跡、遺物に対する研究を深化させる過程において、古代朝鮮の人々の太陽崇拜と関連した新しい学術的見解を提起し、解明した。

開城市サンゴ里の天馬山で調査された日の出岩の性格に対する学術的解明がその主な実例になる。開城市サンゴ里邑の北東2kmに位置した天馬山の一つの峰である高日嶺の頂上には、高さ6.3m、幅4.7m、厚さ3.7mからなる花崗岩面に太陽が浮上する姿が彫られている大きな岩が聳えている。

岩面は大ざっぱに整えられており、中心に直径約40cm、深さ約6cmの円形状の図形を刻み、そのまわりに8幹の線が伸びているように見える形状が施され、その周りには一定の深さの多くのみぞ穴が彫られている。

この岩の前には、岩の風化過程ではげ落ちたと思われる小さな岩が転がっているが、その上の部分には加工が施され、地平線に見えるようにすることによって、太陽がすぐ出てくるかのような視覚が得られるようにされていることが明確に分かる。岩の前にはまた、数十名が集まることのできる空地があり、そこでは何らかの行事がなされたものと推測される。

現地住民らの証言によると、この岩は昔から日の出岩と呼ばれ、嶺名も高日嶺ということである。専門家の間では、多くの現地踏査と文献調査、学会での討論を通じて、この日の出岩は古代時期に太陽を崇拜していた朝鮮民族の先祖が残した太陽祭壇であるということに対して意見一致を見ている。

その主な根拠は、遺跡の立地条件と彫られた図形の内容、地名の由来を通じて知ることができるという点である。遺跡の立地条件を見ると、岩は嶺の頂上部分にあり、この岩の東方と南方は斜面で、西方には百余名程度の人々が参集することのできる平地があって、正面の図形に向かえば、浮上する日の出を見ることができ真東の向座になっている。この岩に図形を刻んだ人々の意図は、朝日が浮上する真東に向かって位置するこの岩を特別に選定して、その前で何らかの行事をしようとしたと認定される。一般的に、原始および古代時期の太陽崇拜観念を持った人々は、太陽を敬慕する自らの清潔な感情を十分に表すことのできる神聖な場所は、太陽にもっとも近いところでなければならないと見なしたし、このため地上でもっとも高いところである山、その中でも頂きを選択した。それゆえ、高日嶺の頂点にあり、真東に向かって聳えている岩に、太陽と類似の図形を刻み込んだ人々の意図は、太陽崇拜と関連する行事を行おうとする目的からであったと見るのが妥当である。

また、図形の内容を見ると、岩に彫られた図形は、必ずしも正確な円ではないが、太陽を形状しており、それも前部の岩を地平線に見立て日の出の効果を与え、そのまわりに日差しの形状の幹を刻んでいる。

これに類似の実例は、古朝鮮時期の遺跡である忠清北道沃川郡アントセントルでも探し見ることができる。そこでは、線石の中心部分に太陽の形状をなす直径90cmの丸い円が

描かれており、天文観測および祭壇の役割を果たしたものと見なされている³。太陽を丸い形状に見立てるのは、古代文明を創造した多くの民族の遺跡遺物でも見られ、エジプトでは円い版に形状している。

岩が存在する嶺名の由来を見ると、この遺跡の性格をさらによく知ることができる。天馬山の一つの峰であるこの嶺の名称は、すなわち「高日嶺」であり、日の出を眺めることができる峰という意であるが、つまり嶺の頂点に存在する岩＝「日の出岩」があって生じた名前なのである。歴史や言語、民俗学的実例を見ても、太陽と関連した地名や遺物が少なくなく、古代朝鮮の時期に限定し、祭天行事の名称だけを見ても、扶余の「迎鼓」、句麗の「同盟」などは、天神、太陽に関連し由来する名前なのである。このように、東方に向かって聳え立つ自然岩を選び、それに日の出の情景を刻み込んだというのは、太陽崇拜を象徴する遺跡として読み取ることができる。

次に、朝鮮の歴史の中でも強大な国家であった高句麗の歴史を幅広く総合的に体系化するための学術事業において前進があった。高句麗の歴史研究を深化させるということは、朝鮮民族の歴史を輝かし、朝鮮の歴史を歪曲ねつ造する行為に学術的に対処するための重要な事業になる。

学会では、高句麗史研究の重要性に鑑み、すでに収めた成果に基づいて新しいデータと分析により高句麗史を新たに整理体系化するための事業を計画し、推進した。高句麗政治史の分野では、既存研究の成果を土台に、高句麗で実施された政治の発展過程に対して、政治勢力と政治構造、政治の実現手段など、多くの側面で叙述を行った。従来、高句麗の政治制度史に対する研究は存在したものの、政治史というより幅広い範囲で高句麗の歴史を体系化した研究成果はなかった。

論文では、政治史という題目の特性に合うように、高句麗の政治を主導した勢力に対する分析を通じて、高句麗政治の独自性、言い換えれば高句麗の政治はある外部勢力の干渉によって成し遂げられたのではなく、朝鮮古代国家の胎内で発生・発展した封建勢力によって主導されたことを明らかにした。とくに、高句麗の建国とその主導勢力が誰なのかということを明らかにし、高句麗の発展過程に応じた政治勢力の変遷過程を叙述した。高句麗が建国直後から行った周辺小国に対する統合事業と古朝鮮昔地を取り戻すための闘争、また三国統一のための闘争を通じて多くの住民を抱き込み、その過程でさまざまな政治勢力を引き入れた。そこには、松讓の沸流国のように、朝鮮古代国家の末期に生成した小国、政治勢力と古朝鮮遺民勢力、百濟、新羅の政治勢力、寿のような亡命客勢力などが含まれる。このような条件で、高句麗が存在した全期間における高句麗の政治に加担した勢力の変遷と性格を具体的に解明することによって、高句麗の政治が始終一貫して朝鮮民族的性格を持っていたということを論証した。

3 『朝鮮天文学史2』高等教育図書出版社、2016年、49頁。

高句麗領域史の分野では、高句麗史で明確に位置づけられる領域拡張が、その存在全期間において国家の重要政策となった社会歴史的要因に対して分析した点に基づいて、高句麗建国初期の小国統合闘争時期に拡張、変遷してきた高句麗の領域について記述した。ここでは、高句麗建国当時の領域が先の時代の句麗末期の領域、すなわち5部の範囲そのままであったものの、その後高句麗が小国統合政策を推進しながら、周辺に散らばる群小政治勢力と諸国を統合し、東方は今日の咸鏡北道の大部分地域は言うまでもなく、咸鏡南道の一部地域を含んだ海岸線一帯とロシア沿海の辺疆一帯まで、北方は吉林地域まで、西方は本溪一帯までの広い版図を占める広大な国となった。また、B.C. 2世紀末、漢の東方侵略により古朝鮮が滅亡し、高句麗の一部地域も漢の占領下に置かれるようになったが、高句麗は奪われた地を取り戻すための闘争を繰り返す過程で、間もなく大部分の地域を回復した。A.D.30年代には、西南方面に進出し、遼東半島南東に存在した嶺東7県地域を占め、高句麗は古朝鮮滅亡後にその遺民が鴨緑江以南地域に建てた諸国を統合するための闘争に力を注ぎ、南方の薩水（大同江の支流である黄州川）と江原道一帯まで進出し、曷思国のような扶餘滅亡後に生じた小国も統合して、北方をも領域を拡張したことを説明した。

高句麗が外来勢力の侵攻に対して繰り返した闘争史の分野では、高句麗が自らの存在の全期間に涉り敢行したその闘争について、高句麗が周辺の小国、政治勢力の統合を主な課題に提示していた時期に行った反侵略闘争、古朝鮮昔地を取り戻すために繰り返したねばり強い闘争、南方の百済と新羅を統合するための三国統一闘争に注力しながら、多くの勢力の侵攻を退けるための闘争について具体的に叙述した。

高句麗軍事史の分野では、高句麗の強大な軍事力を裏付けた軍事制度、軍事芸術、武器武装について叙述することにより、高句麗の軍事史を総合的に幅広く体系化した。ここでは、高句麗の軍事制度に対して、兵役制と軍隊編成、武官職制度および軍事統帥体系などの側面で叙述し、高句麗の軍事芸術に対して反侵略闘争の過程で創造された攻撃戦法と防御戦法をはじめとする軍事戦法の分析に基づいて、戦法の巧みな配合、奇抜な戦略戦術などを解明した。とくに、高句麗軍は、大部隊野戦と城市攻撃戦、騎兵戦、陣地防御前、追撃戦、誘引欺瞞戦術、待ち伏せ奇襲戦を結合しつつ、情勢変化に見合った活用を行い、その威力を轟かした。また、水軍は、朝鮮東海（日本海）と西海（黄海）の航路開拓と遠洋航海、上陸戦と反上陸戦、水陸並進作戦の遂行など、数多くの戦闘と活動過程において、その戦闘力を強化し、新たな戦闘助法を適用発展させて水軍軍事芸術をさらに発展させていったことを強調した。

高句麗対外関係史の分野では、先行研究の成果に立脚し、これを基礎にしつつ一部未解明の問題と主要な歴史的事実、西域との関係問題などに対する新たな見解を補充して、高句麗の対中国関係史を総合的に叙述し、高句麗と倭（日本）の関係に対しては、高句麗-日本関係が4、5世紀から7世紀中葉の高句麗が滅亡するときまでの期間の高句麗人の日

本列島進出と定着内容、彼らが日本に与えた文化的影響、とくに河内と大和に形成された高句麗政治集団を浮き彫りにして叙述した。

また2016年に、高麗の首都である開城満月台で発掘された金属活字が高麗時期の金属活字であることが新たに解明されたのも学会で収めた成果の一つである。開城満月台での発掘過程において、2015年4月に高麗時期の金属活字4点が新たに発見された。発見位置は、高麗王宮の満月台西部建築群の南の部分で、およそ200㎡（東西の長さ20m、南北の幅10m）に対する精密調査過程で発見された。

今回新たに発見された4点の金属活字のうち3点は、およそ横12～13mm、縦10～11mm、高さ6～7mmの直六面体形であり、一面には字が突き出ており、裏面には玉または反球状の溝が出ていて、1点は縦横の大きさがそれぞれ6～7mm程度である。この金属活字は、それぞれ「汙」、「槽」、「名」、「明」字で、材質は青銅であることが明らかになっている。従来知られていた高麗時期の金属活字は、全部で7点だが、このうち1点は解放前に開城の高麗王陵から出土したという「復」字で、現在南朝鮮（韓国）にあり、他の1点は1956年に満月台の回慶殿西方300mの地点で出土した「癩」字であり、現在朝鮮中央歴史博物館に保管されている。また異なる1点は2015年11月、高麗満月台北南共同の発掘過程において発掘されたもので、「媯」字と解釈されている。

新たに発見された金属活字は、12～13世紀に鑄造された活字であることが判明している。高麗王宮の敷地である満月台で新たに発掘された高麗金属活字は、朝鮮が金属活字の発明国であり、朝鮮民族が世界文明の発展に寄与した民族だということを示す財宝になる。

3. 日本による朝鮮侵略時期の歴史研究の展開

朝鮮歴史学学会の最近の研究動向と成果で注目されるのは、第三に日本の朝鮮侵略と植民地の歴史をより幅広く解明するための研究が活発に行われたことである。まず、朝鮮の伝統的な標準時間を改変した日本の策略を資料的に明らかにし、標準時間を取り戻すための学術事業において成果が成し遂げられた。

武力による脅威と恐喝、謀略の方法で「乙巳5条約」（第二次日韓協約）を強要して、朝鮮を不法に占領した日本は、占領初日から「朝鮮統治の根本方針は内鮮の一体化であり、究極の目標は朝鮮を四国、九州化することである」と主張しつつ、朝鮮人民を日本人化し、朝鮮を日本の領土の一つの構成部分とすることを植民地統治の根本方針、究極の目標とし、その実現のために行動した⁴。

朝鮮の民族性を抹殺するためのそのような日本の策略のうちの一つは、朝鮮の標準時を改変し、日本の標準時を使うように強要したことである。歴史的に見ると、朝鮮では当代

4 『日本人の海外活動に関する歴史的調査』通巻第3冊、朝鮮篇、第2分冊、大蔵省管理局、3頁。

国家の都の地（首都）に位置する子午線を本初子午線にして標準時を定め、1日を12時間とする時間制を制定して使用してきた。その後、1884年にアメリカのワシントンで行われた国際会議において、イギリスのグリニッチ天文台を通る子午線を本初子午線（0度）とする15度間隔の24の時間を設定し、それぞれの諸国は自国が該当する時間の主子午線を基準（本初子午線）とする地方平均太陽時を標準時にすることとの決定が採択された。これに基づき、朝鮮封建王朝では、1日12時間体系を24時間体系に変更するとともに、東経127度30分を本初子午線とする標準時を使用するようにした。しかし、日本は、武力による脅威と恐喝、謀略の方法により「乙巳5条約」を強要して朝鮮を保護国化し、その直後の1906年6月2日に朝鮮の標準時を改変するための第一歩として、朝鮮に設置した自らの官庁では朝鮮の標準時使用を改変しようと企てた⁵。

これに対して、朝鮮封建王朝の最後の王である純宗は、崩壊寸前の国権を維持しようとする試みの一つとして、1908年2月7日に勅令第5号「大韓国標準時の件」を批准し発布して、東経127度30分を標準時とする時間制を法的に固着させ、4月1日から施行するようにした。そうしたところ日本は、未だ名目上において朝鮮封建国家が存在するなかで、朝鮮封建王朝の執権者と標準時の問題で関係を悪化させる必要がなく、また互いに異なる標準時を使用することにしても、事業上不便ではなかったため、1908年4月1日から統監府でも朝鮮標準時を使うようにした。

その後、1910年に朝鮮を軍事的に完全占領するようになると、日本は「内地との関係がなおまた密接であり、相互の交通が頻るのに従う」時間を統一させる必要が提起されたとして、1911年11月16日の「朝鮮総督府」告示第338号によって、翌年1月1日から朝鮮標準時の代わりに日本標準時を朝鮮のすべての機関、企業所とすべての人々が無条件に使用するよう強要した⁶。

日本は朝鮮併合後、朝鮮人民が使用してきた朝鮮標準時を改変し、従来と30分も異なる日本標準時を使うように強要した目的は、当面朝鮮に対する植民地統治を円滑に進めるようにし、究極的には朝鮮を時空間的に喪失させてしまうことにあった。したがって、朝鮮は祖国解放70周年である2015年8月15日からこの標準時を改正し、朝鮮特有な標準時を「平壤時間」と命名し、それを固着させることとした。

植民地時代の日本の悪しき過去を明らかにするための学術事業において成し遂げられた成果のまた一つは、原子爆弾開発が資料的に調査、確認されたことである。その重要内容は次の通りである⁷。

日本は、侵略戦争の遂行と世界制覇の野望実現のために、原子爆弾開発計画を作成し推

5 『施政25年史』朝鮮総督府、1935年、185-186頁。

6 同上。

7 『労働新聞』2016年10月11日、10月21日、10月25日、11月8日付。

進した。この事業には、天皇の指示によって、軍部と政界、財界、学界が総動員された。日本の原子爆弾開発は、初期には旧日本陸軍と海軍がおのおの原子爆弾製作のための基礎研究をはじめたが、1944年後半になると、「陸海軍技術運営委員会」の総括の下に推進されることとなった。

当時、濃縮ウラン製造のために、日本理化学研究所の仁科芳雄博士を主軸とする「2号研究」組が熱拡散法により、また京都帝国大学物理学教授荒勝を主軸とする「F計画」組は遠心分離法により、ウラン235を分離しようと試みた。首相兼陸軍相であった東条英機は、アメリカ、ドイツの原子爆弾開発情報を入手し、いかなる手段と方法を尽くしても原爆開発において立遅れないために、すべての人的、物的資源を総投入するようにし、これによって濃縮ウランの量的生産体系を確立するための研究開発を推進する一方、朝鮮と満州、東南アジア地域からウラン鉱石を大量に持ち込み濃縮実験を行ったが、当時の日本の技術力が未熟で成功しなかった。

このため日本は、政治軍事的同盟関係にあったドイツに期待をかけ、ベルリン駐在日本大使大島浩を推して、ウランおよび核技術提供と関連した裏交渉を繰り返した。ドイツは、初期には金と生ゴム、アヘンなどの物資提供を受ける代わりにウランを提供したが、敗戦直前には日本との共同開発を追求して核物質と技術を渡し、その局面では双方の遠洋潜水艦が大きな役割を果たした。

当時、日本は原子爆弾が爆発する際には数百万の高熱を発生し、人体に致命的な熱線および放射線が多量放出されることを知り、このため原子爆弾製作とその実験場を朝鮮とすることに定め、興南地区に所在した野口財閥の化学、金属工場を原子爆弾開発の拠点にし、原子爆弾製作およびその運搬手段と燃料の製作を総称する「NZ計画」を作成し推進した。また、日本は秘密裏に進めた工事のために、全国各地で数多くの朝鮮人を酷使させたり、その過程では秘密工事に動員した朝鮮人労働者を虐殺して死体を海に捨てたり、工場内で焼却したりした。さらに、敗戦間際に日本は、開発中であった原子爆弾に最後の期待をかけ、試験的に原子爆弾を急ごしらえして、1945年8月12日の明け方、興南近海の海上で爆発実験を行い、この際きのこ雲と強烈な熱線および光放射が巻き起こった。日本は、この際の性能を確かめるために、試験水域に廃船舶とともに多くの朝鮮人を漁船に乗せたが、彼らはひとりも生きて帰ってくることはできなかった。加えて、日本は、敗戦とともに、朝鮮総督府と日本海軍の武官部、咸興駐屯日本軍司令部の指令に基づいて、原子爆弾製作のための主要施設を破壊し、処理しきれない装備と物資は海上に廃棄した。

アメリカは、日本の敗戦を前後した時期、日本軍捕虜に対する審問、南部朝鮮駐屯米軍諜報機関の調査、日本における原爆研究状況に対する実態調査などを通じて、日本の原子爆弾開発計画と爆発試験に対するデータを掴んでいたが、核情報データを独占し、日本をアメリカのアジア支配戦略の橋頭堡とし、突撃隊として利用しようとする戦略下において、日本の核情報データを隠蔽した。このように、日本はすでに第2次世界大戦時期にお

いて、原子爆弾開発に乗り出した歴史を有しており、アメリカは日本の原子爆弾開発を隠蔽した責任を有している。

朝鮮に存在する日本人遺骨問題に対する研究においても、一連の成果があった。日本人遺骨問題は一言でいって、日本の侵略戦争過程に発生した問題である。

朝鮮北部に日本人墓地が生じるようになったのは、日本がアジア・太平洋戦争を引き起こし、その戦争の過程で捕虜軍人と軍属、民間人の避難民が発生し、敗戦の副産物として生じた飢餓と伝染病により死が蔓延した事情と関連している。このような事情による死者の数は、およそ3万3,800名に達すると推算されている。そうして生じた墓地の前に墓碑を立て、その墓を守るべき日本は、3万を越える自国民の遺骨に対してこれまで傍観してきた。当時、朝鮮は解放直後であり、統一政府が未だ樹立前であったものの、地方政権は日本人墓地を別途用意するよう承認し、その後やむを得ず埋葬地を移すときには、赤十字社を通じて日本側に移葬することとなった戦後の事情を知らせることまで行った⁸。

敗戦の過程において数多くの生命が絶たれたのは悲劇であるが、朝鮮の地に埋葬され、無主孤魂となった日本人の遺骨を訪れるのは、戦後の日本政府の責任であり、義務であった。しかし、日本は戦後処理の重要な事項である朝鮮に存在する日本人遺骨問題に対しては、当初から議論さえしなかった。朝鮮の地に3万の日本人遺骨が埋められていることを等閑視するような無責任な発言をする人もいる。

幾つにもならない日本人墓地に立てられた墓碑が現在まで残存するわけがないということは余りにも明白な事実である。問題は幾つかの墓碑石にあるのではない。それは墓碑石を語りかけようとする墓の主人の側の問題である。換言すれば、朝鮮北部の約70か所に埋葬された日本人遺骨の主人である日本人自身に対する問題である。このように、朝鮮は始終一貫して人道的な原則と立場から、日本人墓地を保護してきた。

おわりに

今後、朝鮮の歴史学学会では、朝鮮民族の歴史を輝かし、朝鮮の歴史を歪曲ねつ造する行為⁹に学術的に対処するための研究を一層深化させていくであろう。

(HWAN Myong Chol)

8 『終戦後平壤における死亡者と竜山墓地』中央日報協会、1958年、32-37頁。

9 歴史的真相を歪曲しねつ造する行為として具体的には、「任那日本府」説や朝鮮に対する日本の植民地統治の「適法性」主張、「日本軍性奴隷」法罪の否認、高句麗、渤海を中国の少数民族の地方政権として見なすことなど、実例を示すことができる。